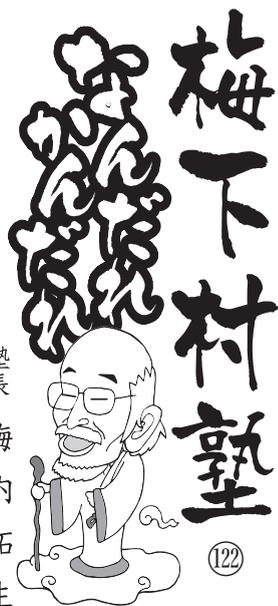


# 「森と水と命の惑星」国際会議

## ～地域と世界の心と魂を詠む～



塾長 梅内 拓生

のか？それは「長いものにはまかれる」いう日本文化に深く関係している。梅下村塾(121)の(21世紀と地球規模の天変地異)と「レンタル思想」は梅下村塾(122)の(式年遷宮)と「曼荼羅」の循環思想とつながってくるのである。

(東海新報記事から) 前回の梅下村塾(121)の(21世紀と地球規模の天変地異)で「世迷言」の「天網恢恢疎にして漏らさず」に触れたが、これを今回は空海密教の視点から触れて見たい。

梅下村塾(121)のキーワードは「共生・共死」と「レンタル」であり、これは地球生命世界の存続の願いと結びついている。空海密教の曼荼羅でも天の計らいは「天網恢恢疎にして漏らさず」であるといっているのである。

このために宗教家は真言曼荼羅を唱え、草の根の人々は日々少しずつ詠めば天の計らいを身につけることができるかと考えられる。このような視点から、東海新報社と付き合っ

紀もつづいた。ところが、紀元1世紀ごろ、インド北西部の一角において忽然と彫刻としての仏像が出現するのである。そのあたりにサンスクリットを解しない民族がいて、仏というものを目で見たいという衝動を持った。

そういう衝動は、言語による論理と詩的表現だけで満足していたインド内部の仏教徒にとつて思いもよらぬ事であったろうが、人間の形を写実的に彫塑する能力を持った民族にとつては、ごく自然のものであった」と述べている。

これは紀元前300年代にアレキサンダー大王の大遠征によるインドの論理的なサンスクリットが生み出した仏教文化と人間の肉体を写実的にかつ美的に創造しうるギリシャ文化の遭遇によるものであると述べている。

空海の密教マンダラはギリシャ、インド、中国文化の邂逅の中から生まれてきているわけである。いわば空海の密教曼荼羅から数万年の縄文文化を持つ日本でどのような文化的運動展開を行い、それが21世紀の現代文明にどのような影響を及ぼしているかを探りだすことは極めて意義あることであると思われ

とが重要であると思われる。草の根に言い伝えられている「長いものにはまかれる」という諺は、生きのびるための知恵の一つである。しかし国の形をつくり、治めるべき立場の人は、まず地球と世界の色々な状況を勘案して、お互いに「生きて行くために協力すべき場」の構築を考えなければならぬ。

現在も活躍中のある老練の政治家は、「国連参加の為に戦勝国が突き付けた不当な条件、これは連合国司令部とマッカーサー元帥が押し付けた人類の歴史的经验を無視したものである。したがって、日本国憲法はサンフランシスコ条約が押し付けた人間の闘争本能への現実的対応を否定している、これは後に破棄すべきであった」と言っている。

吉田茂首相と日本の当時の政治家はこれを実行しなかった。あれほどの組織的ナチの残虐が報道された西ドイツは、自国の憲法は自分で創ると主張して、他国の干渉を拒否した。

西ドイツと日本のちがいの根本はどこにあるのか？それは「長いものにはまかれる」いう日本文化に深く関係している。梅下村塾(121)の(21世紀と地球規模の天変地異)と「レンタル思想」は梅下村塾(122)の(式年遷宮)と「曼荼羅」の循環思想とつながってくるのである。

(曼荼羅(現代))

東海新報から「空海」のビデオが送られてきた。梅下村塾(121)の気仙三十三観音巡礼の時にお願いをしていたものが送られてきたのである。真言密教の開祖である空海はお大師様として知られており、今でも盛んな四国巡礼などはお大師様参りのひとつである。

には知るよしもないが、現代宇宙物理学の提示する宇宙構造と運動のイメージと重なってくるものがある。現代科学は宇宙空間に飛び立ち、地球を外から眺められるようになった。これは同時に人間が宇宙にごみを放り出して宇宙を汚染していることにも気が付き始めている。

「空海」のビデオを見て心を打たれたことは唐の密教の正統な後継者である老齢の恵果が日本から留学生として唐に渡った空海に面接して、空海こそが密教の正統な後継者になる資格があると見抜いて、全身全霊をかけて空海に密教を伝授したことである。

空海は唐に留学生として渡るときには既に密教の奥義を受け入れたものを孕んでいたものと思える。それは宗教奥義相伝の妙である。曼荼羅の奥義は私

空海の曼荼羅には炎のように燃え上がる欲望のエネルギーをどのように制御して宇宙の生命の知恵として受け継ぐべきか、そのための「芽」が「真言」として込められていると感じている。私は草の根の凡夫として日々の生活を短く詠み、それらを色々な言語に訳して交換すれば現代世界の曼荼羅が生まれて来るものと考えている。

司馬遼太郎は密教の誕生と密教美術で「仏教が仏像を持たない時代が、釈迦没後、数世

紀もつづいた。ところが、紀元1世紀ごろ、インド北西部の一角において忽然と彫刻としての仏像が出現するのである。そのあたりにサンスクリットを解しない民族がいて、仏というものを目で見たいという衝動を持った。そういう衝動は、言語による論理と詩的表現だけで満足していたインド内部の仏教徒にとつて思いもよらぬ事であったろうが、人間の形を写実的に彫塑する能力を持った民族にとつては、ごく自然のものであった」と述べている。

これは紀元前300年代にアレキサンダー大王の大遠征によるインドの論理的なサンスクリットが生み出した仏教文化と人間の肉体を写実的にかつ美的に創造しうるギリシャ文化の遭遇によるものであると述べている。

空海の密教マンダラはギリシャ、インド、中国文化の邂逅の中から生まれてきているわけである。いわば空海の密教曼荼羅から数万年の縄文文化を持つ日本でどのような文化的運動展開を行い、それが21世紀の現代文明にどのような影響を及ぼしているかを探りだすことは極めて意義あることであると思われ

とが重要であると思われる。草の根に言い伝えられている「長いものにはまかれる」という諺は、生きのびるための知恵の一つである。しかし国の形をつくり、治めるべき立場の人は、まず地球と世界の色々な状況を勘案して、お互いに「生きて行くために協力すべき場」の構築を考えなければならぬ。

現在も活躍中のある老練の政治家は、「国連参加の為に戦勝国が突き付けた不当な条件、これは連合国司令部とマッカーサー元帥が押し付けた人類の歴史的经验を無視したものである。したがって、日本国憲法はサンフランシスコ条約が押し付けた人間の闘争本能への現実的対応を否定している、これは後に破棄すべきであった」と言っている。

吉田茂首相と日本の当時の政治家はこれを実行しなかった。あれほどの組織的ナチの残虐が報道された西ドイツは、自国の憲法は自分で創ると主張して、他国の干渉を拒否した。